The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明の王文璧『中州音韻』の反切について
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 4, p. 149-157
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明の王文璧『中州音韻』の反切について

佐々木　　猛*
SASAKI Takeshi

中文摘要

王文璧《中州音韵》的反切

王文璧的《中州音韵》是明清时代曲韵史上极为重要的韵书之一。

日本内阁文库本载有〈凡例〉8条，其第一条说："翻切、圈注，一遵洪武正韻，其旧本有而正韻無者，闕之，或正韻有而旧本少者，補之。"然而至今尚无学者针对《中州音韵》的这一条进行过研究。

我们在比较《中州音韵》和《洪武正韵》、《韵学集成》两书之反切系统的过程中，发现王文璧修改《洪武正韵》或《韵学集成》的反切并且用以作为《中州音韵》反切的依据。

《中州音韵》的反切系统有一种独特的构造：反切上字大部分是平声字，下字声母则与归字同类，如〈农，奴东切〉〈崩，逋蒙切〉〈空，枯红切〉。

其中所见的例外反切却与尚未修改之《洪武正韵》或《韵学集成》的反切相符。如〈琫，边孔切〉。由此可以推测王文璧根据《洪武正韵》或《韵学集成》的反切而将之改为《中州音韵》的反切。

本文将以（1东钟）为例，证实这些问题。

Keywords：汉语，音韵学，反切，《中州音韵》
キーワード：漢語，音韻学，反切，『中州音韻』

１．王文璧の『中州音韻』は音注が施された最初の曲韻の書である。このあとに続々と編纂された曲韻の書も『中州音韻』の音注を襲用することが多く，また臧晋叔の『元曲選』の「音釋」もこの系統の音注を使っていることなどから，この『中州音韻』の重要性を知ることができる。[1]

その音注は反切の場合と直音の場合とがあり，今回はそのうち反切注について「１東鍾」の韻を例に挙げてその性格を述べようと思う。

＊　元大阪大学言語文化研究科・教授
1　佐々木 1977。

２．『中州音韻』は元の『中原音韻』と同じ 19 韻から成るが，その内容は全く異なるものである。

まず平声は『中原音韻』に見える陰陽の区分はなく，伝統的な韻書と同じく全濁音の声母を復活して，一種類のみである。全濁音の声母はまた去声にも存在する。[2]

それゆえその音系は入声を除くと『中原音韻』よりもむしろ『洪武正韻』のそれに近いものとなる。音韻表１・２・３・４を参照されたい。

３．許徳宝 1991 の考証によれば，編者の王文璧の生年は 1415 年，卒年は 1504 年より後である。そして『中州音韻』の成立は弘治 16 年より後, 正徳 3 年より前であるという（1503－1508）。

日本の内閣文庫に明刊本が蔵せられているが，許徳宝はこれが初刻本であるとする。許徳宝 1991 によれば『中州音韻』は 8162 字を収め,『中原音韻』より 2286 字多く, また『中州楽府音韻類編』より 3936 字多い。また収める小韵はあわせて 1691 ある。[3]

この内閣文庫本の巻首に「凡例」8 条があり『中州音韻』の体例を述べるが，その第 1 条に

翻切、圏注，一遵洪武正韻，其旧本有而正韻無者，闕之，或正韻有而旧本少者，補之。

とある。

本稿は『中州音韻』の反切は実はこの「凡例」にいう通り，『洪武正韻』（あるいは『韻学集成』）の反切をもとにして，これに改良を加えて作製されたものであることを論証しようとするものである。[4]

４．『中州音韻』の反切の特徴の一つに，所謂五音（唇・舌・歯頭・正歯・牙喉）の枠を想定し，反切下字には同類声母の字を用いるようにするというのがある。

たとえば「東、多龍切」において反切下字の「龍」字は「東」と同じ舌音の系統である。

「空、枯紅切」において反切下字の「紅」字は「空」と同じ牙喉音の系統のものである。

「崩、逋蒙切」において反切下字の「蒙」字は「崩」と同じ唇音の系統のものである。

2　上声にも全濁音声母の音節が存在してしかるべきなのであるが，『中州音韻』はもと北方漢語を表す『中原音韻』系統の書をもとにして編纂されているものであるから，上声の全濁音声母の音節はすでに去声に移っているために，『中州音韻』においても上声の全濁音声母の音節は存在しないという結果になっている。

　たとえば『中原音韻』去声に 1「洞動棟凍蝀」の小韻がある。ここにある「動」字はもと全濁音声母の上声の字であったが，北方漢語の音韻変化の通り，無声化して去声に移ったものである。『中州音韻』の編纂はこのような系統の曲韻の書に基づいているので，その結果として「動」字は去声に移ったままになっていて上声の該当小韻の枠は空欄になっている。

3　わたくしの集計によれば『中州音韻』の所収字は合計 8147，また音節数は 1798 である。

4　『洪武正韻』は明初の洪武 8 年（1375）に当時の「雅音」を基礎に編纂された勅撰の韻書である。『韻学集成』は天順 4 年（1460）に稿成った音韻学の書で，成化 12 年，17 年（1476，1481）の序文を持つ。嘉定の章黼の撰。『洪武正韻』の七十六韻に基づいて十三巻・二十二部に分け，各巻頭に反切表を掲げる。ただ『洪武正韻』が伝統的な四声の順に巻を成すのに対して，相配する韻を平上去入の順に排列している。たとえば，巻 1 は平声「１東２冬３鍾・・・」ではなく，「東董送屋」のように始まる。以下，それぞれ『正韻』『集成』という略称を使うことにする。

また以上の例でも分かるように，反切上字はほとんどは平声字であり，その韻母も韻尾を持たない単純な形式のもので，主要母音は反切帰字の主要母音と同類のものである。

これらはいずれも反切が唱えやすくなるように考えられているのであろう。

５．少数の例外が存在する。

平声 10「濃、尼容切」。舌音を注する反切であるのに反切下字の「容」はそうではない。この音節は『正韻』には存在せず，『集成』における増加小韻に「濃、尼容切」がある。

上声 14「琫、邊孔切」。唇音の反切であるのに反切下字の「孔」は牙音の字である。また反切上字の「邊」字は 10 先天の字で，その韻母は -ien というやや複雑な構造をしていて，鼻音韻尾まで有している。この音節は『集成』『正韻』ともに「琫、邊孔切」の反切である。

以上の２例は『韻学集成』（『洪武正韻』）の反切のままであった。

上声 12「勇、因竦切」。喉音の反切であるのに反切下字の「竦」字は歯音の字である。『集成』『正韻』ともに「勇、尹竦切」で，『中州音韻』はもと上声の反切上字を平声の字に改めている。

上声 13「捧，夫孔切」。唇音の反切であるのに反切下字の「孔」は牙音の字である。『集成』『正韻』ともに「捧，方孔切」で，『中州音韻』は主要母音が異なり，しかも鼻音韻尾を持つ「方-ang」字を，１東鍾の主要母音「u」を持つ平声の字である「夫」に改めた。

以上の例外反切のありさまから『中州音韻』の反切は『集成』『正韻』の反切に基づいて，これに改良を加えて作られたものであると推察される。そしてこれら例外反切は『集成』『正韻』の反切を改訂しないでそのまま使ったものであるらしい。

６．下の四小韻は，上字を改める必要はなく，『集成』『正韻』の反切の下字を同類声母の字に改めればそのまま『中州音韻』の方式の反切になったものである。

篷、浦蒙切。　『集成』『正韻』ともに浦紅切。

通、他隆切。　『集成』他紅切。（『正韻』佗紅切）。

同、徒龍切。　『集成』『正韻』ともに徒紅切。

農、奴東切。　『集成』奴冬切。『正韻』奴宗切。

７．以下の七小韻は『中州音韻』の反切の方式に叶うものであるため，『集成』『正韻』の反切をそのまま採用したものである。

空、枯紅切。　『集成』枯紅切。（『正韻』苦紅切）。

嗊、胡孔切。　『集成』『正韻』ともに胡孔切。

瓮、烏貢切。　『集成』『正韻』ともに烏貢切。

閧、呼貢切。　『集成』『正韻』ともに呼貢切。
動、徒弄切。　『集成』『正韻』ともに徒弄切。
齈、奴凍切。　『集成』『正韻』ともに奴凍切。
戎、而中切。　『集成』『正韻』ともに而中切。

8．ほかにも『集成』『正韻』の反切の上字だけを改めたものが六例ある。
送、思弄切。　『集成』『正韻』ともに蘇弄切。
鞚、枯貢切。　『集成』『正韻』ともに苦貢切。
凶、希容切。　『集成』『正韻』ともに許容切。
邕、衣容切。　『集成』『正韻』ともに於容切。
勇、因竦切。　『集成』『正韻』ともに尹竦切。
捧、夫孔切。　『集成』『正韻』ともに方孔切。

このうち「鞚、枯貢切」は『集成』『正韻』の反切「苦貢切」の反切上字「苦」が上声であるのを平声の「枯」字に改めたものである。「凶、希容切」の反切上字「希」も『集成』『正韻』「許容切」の「許」字が上声であるのを平声の字に改めているし，「勇、因竦切」の反切上字「因」も『集成』『正韻』の「尹竦切」の「尹」字が上声であるのを平声の字に改めたものである。

以上、「1東鍾」の韻を例にして『中州音韻』の反切注はその「凡例」1にいうように『洪武正韻』（あるいは『韻学集成』）の反切を基礎に，これを自らの原則に合うように改めたものであることを述べた。そして『中州音韻』の反切法の原則に合わないものは『洪武正韻』（あるいは『韻学集成』）の反切を改訂しないでそのまま使った結果であることを述べた。

9．次に『中州音韻』の反切は上字に平声の字を使うのが原則であることを述べようと思う。いま「非母」を例にとる。

『中州音韻』において非母の舒声小韻は21例，入作三声の小韻は2例ある。

舒声小韻では反切注は18例，直音注は3例あり，入作三声小韻では反切注が1例，直音注が1例ある。

「非母」反切注の上字に使われているのは僅かに下の三字のみで，いずれも平声の字である。

「方」　敷邦切　11例，（2江陽）
「夫」　方逋切　5例，（5魚模）
「敷」　方逋切　2例，（5魚模）

10．上字が平声字ではない例外反切は『中州音韻』全体のうちで以下の五例のみである。

幫母上声　10 先天　上声「匾、補典切」。この小韻は『集成』『正韻』ともに「補典切」である。

清母入声　13 家麻　入作上「擦、七煞切」。　『集成』『正韻』ともに「七煞切」。

照母入声　18 監咸　平声「詀、竹咸切」。　『集成』は「詀、竹咸切」。『正韻』にこの音節はない。

見母上声　15 更青　上声「礦、古猛切」。　『集成』『正韻』ともに「礦、古猛切」。

暁母上声　12 歌戈　上声「坷、火可切」。　『集成』は「虚可切」。『正韻』にはこの音節はない。

最後の一例を除く四例はすべて『洪武正韻』あるいは『韻学集成』の反切をそのまま採用していて，その結果『中州音韻』の反切としては例外的なものになったのである。

11. 『中州音韻』の反切は上字・下字ともに工夫を加えて唱えやすくしているのであるが，それは実は『洪武正韻』あるいは『韻学集成』の反切を基礎にして，これを自らがたてた原則に合致するように改良したものである，ということが分かった。[5] その「凡例」第１條にいう「翻切、圏注，一遵洪武正韻」については従来検討されてこなかったが，本稿はこの事をある程度論証することができたのではないかと考える。

参考文献

何九盈, 1988,「《中州音韵》述评」,《中国语文》1988, 5, pp374－379.
许德宝, 1989,「《中州音韵》的作者、年代以及同《中原雅音》的关系」,《中国语文》4, pp289－299.
———1991,「王文璧校正『中州音韻』的初刻年代和诸版本的关系问题」,《中国语文》1, pp47－59.
慶谷寿信等，1981，『中州音韻』音注索引，東京都立大学近世音研究会.
佐々木猛, 1977,「明・王文璧『中州音韻』の性格」,《均社論叢》5, pp1－26. 京都大学中文研究室 .
———1983,「『交泰韻』の研究・序説」,《均社論叢》14, pp5－17.
———2008,「明・王文璧『中州音韻』再論」,《日本中国語学会第 58 回全国大会　予稿集》，pp137－141.
曾晓渝, 1991,「“《中原雅音》就是《中州音韵》”质疑」,《中国语文》1991, 1, pp60－63.
张竹梅, 2007,《中州音韵》研究, 中华书局.
龙庄伟, 1991,「论《中原雅音》与《中州音韵》的关系」,《中国语文》1991, 6, pp64－69.

（2010．06．23 受理）

5　『韻学集成』の反切表に基づいて自らの官話音系を表現しようとしたものに，ほかにも明末の呂坤の『交泰韻』がある。佐々木 1983 を参照されたい。

1．周德清『中原音韻』　（　）は中州樂府になし

	1. 東鍾 一				二			
	陰平	陽平	上聲	去聲	陰平	陽平	上聲	去聲
冰 p	崩[18]			迸[69]				
破 p‘	烹[19]	蓬[34]	捧[49]					
梅 m		蒙[32]	蠓[47]	夢[65]				
風 f	風[9]	馮[28]	(唪)[53]	鳳[55]				
無 v								
東 t	東[1]		董[36]	洞[54]				
天 t‘	通[3]	同[20]	桶[39]	痛[62]				
暖 n		膿[25]	噥[52]			濃[26]		
來 l		籠[24]	簟[42]	弄[58]		龍[22]	隴[41]	
早 ts	宗[8]		總[48]	綜[68]	蹤[12]			縱[64]
從 ts‘	匆[11]	叢[29]				從[35]		
雪 s	鬆[10]			宋[57]	松[4]		聳[44]	訟[60]
枝 tʂ					鍾[2]		腫[37]	衆[63]
春 tʂ‘					冲[5]	重[27]	寵[50]	(銃)[70]
上 ʂ								
人 ʐ						戎[21]	冗[51]	
見 k	工[14]		(拱)[45]	貢[56]				
開 k‘	空[7]		孔[38]	控[59]	(穹)[13]	(窮)[23]		
何 h	烘[15]	紅[33]	汞[40]	哄[67]	凶[16]	(熊)[30]	(洶)[43]	
一 ʔ	翁[17]			甕[61]	邕[6]	容[31]	勇[46]	用[66]

２．『中州音韻』

	1. 東鐘 一						二						
	平 聲		上 聲		去 聲		平 聲		上 聲		去 聲		
幫	崩[9]	逋蒙	琫[14]	邊孔	趼[19]	逋夢							
滂	烹[35]	鋪蒙											
並	篷[32]	蒲蒙											
明	蒙[16]	麻崩	懵[3]	蒙㊤	夢[12]	蒙㊦							
非	風[27]	夫崩	捧[13]	夫孔	諷[5]	夫貢							
奉	馮[26]	扶崩											
微													
端	東[1]	多龍	董[1]	多隴	凍[3]	多弄							
透	通[31]	他隆	桶[4]	通㊤	痛								
定	同[19]	徒龍			(動)[4]	徒弄							
泥	農[11]	奴東	噥		(齈)[16]	奴凍	濃[10]	尼容					
來	籠[15]	盧東	籠[8]	盧董	弄[8]	盧凍	龍[14]	驢東	隴				
精	宗[8]	茲鬆	總[5]	茲聳	總[6]	臧送	蹤[13]	賣松			縱[7]	賣送	
清	悤[30]	粗叢											
從	叢[18]	慈鬆					從[17]	齊松					
心	鬆[5]	思宗	聳[6]	思總	送[1]	思弄	松[3]	西宗					
邪											頌[18]	詞綜	
照							中[2]	之戎	種[10]	之冗	衆[14]	中㊦	
穿							充[21]	初戎	寵[11]	初冗	踵[13]	充㊦	(舂)[33]初戎
牀							蟲[20]	池戎					
審							(舂)[33]						
禪													
日							戎[12]	而中	冗[17]	而踵			
見	公[4]	孤翁	拱[16]	居孔	貢[10]	孤瓮							
溪	空[6]	枯紅	孔[2]	枯拱	鞚[9]	枯貢	穹						
群							窮[35]	其容					
曉	烘[22]	呼工			閧[2]	呼貢	凶[34]	希容	洶[15]	凶㊤	(嗅)[17]	虛用	
匣	紅[28]	胡工	噴[9]	胡孔			雄[24]	攜容	(烱)[18]	胡勇			
影	翁[7]	烏公	(翁)[7]	烏拱	瓮[11]	烏貢	邕[29]	衣容	勇[12]	因竦	用[15]	衣誦	
喻							容[23]	移濃					

3.『洪武正韻』

○→増加小韻

韻 / 紐	1. 東											
	東一 平		董一 上		送一 去		東二 平		董二 上		送二 去	
幫 p			琫[5]	辺孔								
滂 p‘												
並 b	蓬[6]	蒲紅										
明 m	蒙[7]	莫紅	蠓[6]	毋揔	夢[15]	蒙弄						
非 f	風[18]	方中	捧[12]	方孔	賵[16]	撫鳳						
奉 v	馮[19]	符中			鳳[2]	馮貢						
微 w												
端 t	東[1]	德紅	董[1]	多動	凍[6]	多貢						
透 t‘	通[2]	佗紅	統[2]	他總	痛[7]	他貢						
定 d	同[3]	徒紅	動[3]	徒揔	洞[8]	徒弄						
泥 n	農[31]	奴宗	癑[21]	乃湩	齈[28]	奴凍						
來 l	龍[4]	盧容	曨[4]	力董	弄[9]	盧貢	隆[5]	良中				
精 ts	宗[9]	祖冬	總[7]	作孔	糉[4]	作弄	縱[10]	將容	從[22]	即勇	縱[5]	足用
清 ts‘	悤[8]	倉紅			謥[3]	千弄						
從 dz	叢[11]	徂紅					從[12]	牆容			從[22]	才用
心 s					送[1]	蘇弄	松[20]	息中	竦[16]	息勇		
邪 z											頌[21]	似用
照 tʃ							中[22]	陟隆	腫[13]	知隴	衆[18]	之仲
穿 tʃ‘							充[21]	昌中	寵[17]	丑勇	惷[27]	丑用
牀 dʒ	崇[24]	鉏中					蟲[25]	持中	重[14]	直隴	仲[19]	直衆
審 ʃ							舂[32]	書容				
禪 ʒ												
日 ʐ							戎[23]	而中	冗[15]	而隴		
見 k	公[16]	古紅			貢[13]	古送	弓[28]	居中	拱[20]	居竦	供[26]	居用
溪 k‘	空[15]	苦紅	孔[9]	康董	控[12]	苦貢	穹[29]	丘中	恐[10]	丘隴	恐[25]	欺用
群 g							窮[30]	渠宮			共[24]	渠用
疑 ŋ							顒[27]	魚容				
曉 h	烘	呼洪			烘[11]	呼貢	胷[33]	許容	兇[19]	許拱	匈[23]	許用
匣 ɦ	洪[13]	胡公	澒[8]	胡孔	哄[10]	胡貢	雄[35]	胡容				
影 ʔ	翁[17]	烏紅	蓊[11]	烏孔	瓮[14]	烏貢	邕[34]	於容			雍[17]	於用
喻 j							融[26]	以中	勇[18]	尹竦	用[20]	余頌

４.『韻學集成』

○→増加小韻

韻 / 紐	1. 東											
	東一	平	董一	上	送一	去	東二	平	董二	上	送二	去
幫 p	[32]		琫	辺孔								
滂 p‘	𦍒[33]	撲蒙										
並 b	蓬[34]	蒲紅	捧	蒲蠓	槌	菩貢						
明 m	蒙[35]	莫紅	蠓	毋揔	夢	莫弄						
非 f	風[36]	方中	捧	方孔	諷	方鳳						
奉 v	馮[37]	符中	奉	父勇	鳳	馮貢						
微 w												
端 t	東[28]	德紅	董	多動	凍	多貢						
透 t‘	通[29]	他紅	統	他總	痛	他貢						
定 d	同[39]	徒紅	動	徒總	洞	徒弄						
泥 n	農[31]	奴冬	癑	乃董	齈	奴凍	濃[25]	尼容				
來 l	龍[26]	盧容	籠	力董	弄	盧貢	隆[27]	良中				
精 ts	宗[6]	祖冬	總	作孔	糉	作弄	縱		慫		縱	
清 ts‘	悤[7]	倉紅	𢘅	且勇	謥	千弄						
從 dz	叢[9]	徂紅			穀	徂送	從[9]	牆容			從	才用
心 s	淞[8]	息中	竦	息勇	送	蘇弄						
邪 z							松[10]	詳容			頌	似用
照 tʃ							中[18]	陟隆	腫	知隴	衆	之仲
穿 tʃ‘							充[19]	昌中	寵	丑勇	惷	丑用
牀 dʒ	崇[22]	鉏中					蟲[21]	持中	重	直隴	仲	直衆
審 ʃ							舂[24]	書容				
禪 ʒ							[23]		𨻰	時勇		
日 ʐ							戎[24]	而中	宂	而隴	𩏂	而用
見 k	公[1]	古紅	𩏂	古孔	貢	古送	弓[11]	居中	拱	居竦	供	居用
溪 k‘	空[2]	枯紅	孔	康董	控	苦貢	穹[12]	丘中	恐	丘隴	恐	欺用
群 g							窮[13]	渠宮	洪	巨勇	共	巨用
疑 ŋ							顒[17]	魚容			𠯑	牛仲
曉 h	烘[4]	呼紅	噴	虎孔	烘	呼貢	凶[15]	許容	兇	許拱	哅	許仲
匣 ɦ	洪[5]	胡公	澒	胡孔	哄	胡貢	雄[16]	胡弓				
影 ʔ	翁[3]	烏紅	塕	烏孔	瓮	烏貢	邕[14]	於容	擁	委勇	雍	於用
喻 j							融[17]	以中	甬	尹竦	用	余頌